

金属溶解用の耐火物を 作り続けて135年

日本ルツボ株式会社

古代から文明の進歩に欠かせない金属。これを溶かす際に用いられる耐火容器がルツボだ。日本ルツボは1885（明治18）年、金属のロスを少なく溶解できる「黒鉛ルツボ」の国産化を目的に創業した。以来135年にわたってルツボや耐火レンガなどの耐火物を鑄造・鉄鋼業界に供給し、自動車、建設機械、工作機械、住宅産業など日本の基幹産業を支えてきた。

◎業界初の加工法・製品を次々と生み出す

長い歴史の中で転機となったのが1970年代の石油

ショックである。当時は売り上げの大部分が鉄鋼向けだったが、製鉄各社が系列会社からの調達に切り替えたため、売り上げが激減した。そこで自動車中心の鑄造向けに舵を切り、現在は鉄鋼向けの3倍を売り上げる。耐火物市場全体の8割は今も鉄鋼向けだが、同社はアルミや銅合金など非鉄向けが得意だ。

金属溶解で培った技術を生かし、業界をリードする加工法や製品を次々と開発してきた。その1つが1982年に導入した大型CIP装置を使い、ゴム型を介して水圧で成形するCIP成形法を国内で初めてルツボに取り入れたことだ。これにより従来法に比べ、より緻密で均質な組織が得られることからルツボの寿命を大幅に伸ばすことが出来た。

溶解炉から金属を受け型に流し込む「取鍋」の事前加熱にも新機軸を打ち出した。通常はバーナーで加熱するのに対し、炭化ケイ素（SiC）ヒーターを用いた装置を提案。熱効率がバーナーの15%に対して70%と高く、大幅な省エネ・低コスト化を実現する。加熱による騒音



135年の歴史を尊重しつつ、常に最先端の技術を追求し続けている

● 社是・理念

【経営理念】

わが社は、創造性豊かな活気に満ちた役職員により、伝統を守りつつ、いかなる時代、いかなる環境にも適合する会社を、目指します。

【社是】

人に笑顔
社員に安心
顧客に満足

仕事に挑戦
社会に貢献
会社利益



代表取締役社長

大久保 正志 氏

●長寿の秘訣

常にその時代その時代が必要とされる製品を供給し続けること。

22年3月期を最終年度とした中期計画を策定した。①生産性向上②新市場・新分野への取り組み強化一が柱で、例えば大阪工場（大阪府東大阪市）ではチーム全員で議論しながら無駄を抽出・改善し、1年間で生産性を20%高めた。「時代に即した製品開発や事業形態を進める原動力は人材に尽きる。社員がいきいきと働き、意欲をもってやりたいことができる会社になりたい」と大久保社長は決意する。



社員一人ひとりが夢を抱き、目標を達成していくことで、お客様に新たな価値を提供し続けていく

●会社概要

創 業：1885（明治18）年1月

設 立：1906（明治39）年12月

所 在 地：東京都渋谷区恵比寿 1-21-3 恵比寿 NR ビル

事業内容：耐火物・中小型溶解炉の製造・販売、海外事業、不動産事業

売 上 高：連結 97 億円（2019 年 3 月期）

社 員 数：連結 229 名（2019 年 3 月 31 日現在）

URL：http://www.rutsubo.com/

技術を供与。中国、タイの企業には出資もしており、輸出を含めた海外売上高比率は6・6%に高まった。2013年には豊田工場（愛知県豊田市）で2メガワットの太陽光発電事業も始めた。新分野への挑戦はまだまだ続きそうだ。



平成30年12月に稼働を始めた大型CIP。大型製品の製造と成形時間の短縮を実現

やCO2排出がなく、安全監視も不要になり省人化にも貢献する。

このほか、表面に溝をつけて燃費節約と溶解時間の短縮を実現したルツボや、低レベル放射性廃棄物を溶解減容し隙間なく閉じ込める世界初の原子力発電所向け特殊ルツボも製品化した。

現在の黒鉛ルツボの国内同業シェアは約38%。「代理店販売が主力の競合他社に対し、50人以上の直販営業を抱えて即座にサポートできる点が強みだ」と大久保正志社長は話す。中小型溶解炉の製造・販売も手がけ、溶解炉・焼却プラントなどのメンテナンスも行う。

海外では75年にドイツに合弁生産会社を設立したのを皮切りに、ブラジル・メキシコ・米国社に相次いで